形容詞＋形容詞タイプの複合形容詞について

近　藤　研　至

0　はじめに

合成語には複合語と派生語とがあり、形容詞(1)として分類される語詞の中にも、こうした合成語が存在する。たとえば「小高い」「か細い」「だだっ広い」「こっ恥ずかしい」などの「接頭辞＋形容詞」によって構成されるタイプと、「くどくどしい」「あつぼったい」「汚らしい」「水っぽい」などの「形容詞語幹・名詞＋接尾辞」によって構成されるタイプは、いずれも派生語である。それに対して、「息苦しい」「手痛い」「毛深い」などの「名詞＋形容詞」によって構成されるタイプ、「粘り強い」「親しみやすい」「待ち遠しい」などの「動詞連用形＋形容詞」によって構成されるタイプ、「けち臭い」「邪魔くさい」など「ナ形容詞＋イ形容詞」によって構成されるタイプ、「青白い」「薄暗い」「うれし恥ずかしい」などの「イ形容詞＋イ形容詞」によって構成されるタイプなどは、いずれも複合語である。

小論は、形容詞＋形容詞によって構成されるタイプの複合形容詞(2)について、語構造の側面と語形成の側面から考察をおこなうものである。

1　形態的特徴

たとえば

(1)　細くて長い

(2)　細長い

(1)は句で、(2)は複合語である。いくつかの語によって構成されている句とは違って、複合語はそれ全体で一つの語であり、それを構成する要素の間に形態的緊密性lexical integrityを有する。この形態的緊密性は、日本語の複合語においてはいろいろな方法によって保証され

---

(1) 小論では、「美しい」「大きい」などの「イ形容詞」と、「元気だ」「親切だ」などの「ナ形容詞」の両方をあわせて「形容詞」と呼ぶ。

(2) 以後「AAタイプの複合形容詞」とする。なお、AAタイプの複合形容詞において、先行形容詞をA1とし、後続形容詞をA2として扱う。

ているが、AAタイプの複合形容詞においては、どのような形態的特徴を持って保証されているのだろうか。

1-1　形態的特徴

AAタイプの複合形容詞において、A1には形容詞の語基が立つ。「ナ形容詞＋イ形容詞」によって構成されるタイプでは、「けち臭い」「邪魔くさい」など、「けちだ」「邪魔だ」の「けち」「邪魔」という語基が先行するし、「イ形容詞＋イ形容詞」によって構成されるタイプにおいても、「青白い」「薄暗い」「うれし恥ずかしい」など、「青い」「薄い」「うれしい」の「青」「薄」「うれし」という語基が先行している。

こうした性質はAAタイプの複合形容詞に限ったものではなく、複合語の中で、先行する語が活用語によって構成されている場合に共通した形態的特徴である。複合動詞の場合、「待ち焦がれる」「どなりつける」「突き刺す」「捻じ曲げる」「はい回る」など語彙的複合動詞の、また「読み始める」「走り終わる」「書き直す」「言い忘れる」「住み慣れる」など統語的複合動詞の、いずれのタイプ(3)であっても、先行する動詞の形態は連用形をとる。動詞の場合、語幹とすると子音終止であり、複合語における先行部分で語幹を差し出すことはできない。そのため、語幹が概念を負担する部分としたときに、動詞はその名詞形としての連用形が、先行動詞の形態としては必然的に選択されることになる。それに対して複合名詞の場合、その先行語には動詞と形容詞の場合がある。「押しボタン」「積み木」「消しゴム」「釣り竿」など動詞が先行する場合も、「白装束」「長縄」「厚紙」など形容詞が先行する場合も、それぞれ先行する活用語は、複合動詞、複合形容詞同様の形態をとる。なお、「単位が足りなくて卒業できないかも症候群」「家族で入ろうキャンペーン」「生きてるうちが花なのよ　死んだらそれまでよ党宣言」など、これも複合語の一つと言えるのであるが、先行する句は名詞が後続するにも関わらず、その接続箇所にある要素は連体形をとらない。これは連体形をとらないということ自体によって、（さらに言えばアクセントの一体化がなされることで）連体修飾と区別され、句全体で一つの語(要素)相当として扱われていると言えるだろう。

---

(3) 統語的複合動詞と語彙的複合動詞の定義は、影山(1993)で示されている、それが統語部門で作られるか語彙部門で作られるかといった理論的な枠組みの中での分類に従う。

以上、活用語が先行する複合語について取り上げたのであるが、A1がいずれもこうした概念形(4)をとることは、形態的緊密性を保証する方法である。もし仮に文中でX、Yの順で語が連続する場合で、かつXが活用語である場合、Yが活用語かそうでないかによってXの活用形態は変わる。それと同様の語順でXとYが連続する複合語の場合、それが句ではないということを明示するためにも、先行要素は活用ということを積極的に排斥した形で、すなわち概念形をもって差し出される。このことによって形態的緊密性が保たれることになる。AAタイプの複合形容詞もこれと同様で、A1には形容詞の語基が現れる。

ところで、蜂矢(2012)は上代語を対象としたものであるが、「トホナガシ(遠長)」は「「トホ＋ナガ」＋シ」という構成であるとしている。今、AAタイプの複合形容詞の形態的特徴としてA1は語基であるということを述べた。しかし、これはA2との関係から述べなくてはならず、(さらに言えば複合動詞の場合も視野に入れた考察が必要であろうが、)蜂矢の指摘を簡単には肯定するわけにはいかない。すなわち「読み始める」ははたして「「読み＋はじめ」＋る」なのか、「突き放す」は「「突き+放」＋す」なのか、そうした問いを経過した中で考察されなければならないのである。その上で複合形容詞は複合動詞と違って、たとえば「青白い」は「「青＋白」＋い」なのか、「薄暗い」は「「薄＋暗」＋い」なのか、考えなければならないだろう。複合形容詞の場合、形容詞の語尾は「イ」であり、動詞のように語尾のバラエティがないということで蜂矢のような指摘が生まれるのかもしれない。また、形容詞語幹由来のいろいろな語詞があることもこうした指摘の根拠になっているのかもしれない。こうしたことを広く説明するには、蜂矢のように語幹同士の結びつきによる語構成という指摘を肯定した方が説明能力が高そうなのである。しかし上で述べたように、これは複合語全体の問題として捉える必要があるし、もしそうでないとしたら、なぜ複合形容詞と複合動詞が同じく複合語なのに、その構成が根本的に違うのかということを説明しなければならなくなる。

小論ではAAタイプの複合形容詞は、蜂矢の指摘するような語構成ではないと考える。そして複合形容詞は、やはりA1＋A2という語構

---

(4) これを名詞形とできないのは、動詞と形容詞とでは異なっているからである。動詞の場合は名詞形としていいのであるが、形容詞の場合、語基と言える部分で、名詞形とは言えないからである。とりあえず、両者の共通点から、その意味負担部分であるということを優先して、こうした仮称を施しておく。

成であると考える。そしてA1は、形態的緊密性を保つために、積極的に語尾を欠いているという態度をとりたい。

1-2　音韻的特徴

AAタイプの複合形容詞は以下の音韻的な特徴も持つ。

一つ目は、AAタイプ全体において、アクセントの一体化(5)が見られるということである。たとえば、「短い」は2音節目で上昇するアクセントであるが、「ふと短い」の場合、「短い」の第１音節は高い位置にある。「薄明るい」「堅苦しい」「細長い」などにおける「明るい」「苦しい」「長い」も同様である。また、A1は、単独で形容詞としてあるときは下降調アクセントであるが、語尾イがなく語基のみで平板調アクセントをとる。たとえば「太い」なら「と」の位置にアクセント核があり、イは低い位置になる。これは形容詞全体に見られるアクセントの特徴である。しかしAAタイプの複合形容詞は、1-1で見たように、A1には形容詞の語基が現れる。そのためA1においてアクセントの下降はなく、そして続くA2もそれと同じ高さで持続する。それぞれのアクセントを示すと次のようになる。「ふとみじかい（太短い）」「うすあかるい（薄明るい）」「かたくるしい（堅苦しい）」「ほそながい（細長い）」である。

二つ目は、複合語には後続要素に連濁をおこす現象がみられることがあるが、AAタイプの複合形容詞も同様の特徴を持つということである。「あまずっぱい（甘酸っぱい）」「あおじろい（青白い）」「わるがしこい（悪賢い）」「うすぐらい（薄暗い）」などである。もちろん、AAタイプで、連濁が起こりうる形態的な条件がそろっても、常に起きているわけではない。「好き嫌い（cf.ぎらい）」「重苦しい（cf.ぐるしい）」「甘ったるい(cf.だるい)」「長たらしい(cf.だらしい)」などはAAタイプの複合形容詞であるが、A2の語頭子音は連濁を起こしていない。

ここで述べたアクセントの一体化と連濁は、ともに形態的緊密性を保証する形態的特徴の一つである。

---

(5)「アクセントの一体化」という言い方は三宅(2011)に倣った。

2　A1とA2との関係

2-1　A1とA2の統語構造

Xという先行要素とYという後続要素の結合により形成されている複合語において、XとYとの統語構造(6)は、格関係・等位関係(7)・修飾関係がある。今問題にしている複合語はAAタイプの複合形容詞であることから格関係の場合はないが、修飾関係と等位関係の二つがあるということについては、影山(2009)をはじめ多くの指摘がなされている。

修飾関係：薄暗い・細長い・浅黒い...

等位関係：甘酸っぱい・青白い・ずるがしこい...

しかし、AAタイプの複合形容詞のA1とA2の統語構造に修飾関係と等位関係を認める従来の研究は、次の西尾(1972)の指摘についてどのような解決策を与えるのであろうか。

> 基本的な味の形容詞が二つくみあわさった形の複合形容詞としては「あまずっぱい」（「あまずい」も）がある。「甘味があって酸っぱい」(広辞苑)のように「すっぱい」の下位に属する語としてみるか、「甘みとすっぱみとまじった味の形容」(例解国語辞典)のように第三の味とみるか問題がある。

西尾の指摘は、「甘酸っぱい」という一語の問題として取り上げていることであるが、これは実は影山が指摘している統語構造の問題にまで敷衍されるべき問題である。つまり、西尾の言う『広辞苑』の解釈なら修飾構造であるし、『例解国語辞典』の解釈ならば等位構造となるからである。

さらにAAタイプの複合形容詞の統語構造として修飾関係と等位関係があるとするならば、「高低い」「長短い」「うままずい」などがないということを説明しなければならなくなる。すなわち、等位関係による形成が期待されるにもかかわらず、存在しない複合形容詞があるということは、等位関係にありながら、それが結合しないという現象については、何がその理由となっているかを説明しなければならない義務が発生するのである。しかしそれを説明したものは残念ながら、ない。

---

(6) こうした要素間の関係は、研究者によって「統語構造」と呼ぶものと「関係」と呼ぶものとに分かれるが、小論では「統語構造」を選択しておく。

(7)「等位関係」については「並立関係」「並立構造」というように研究者によって異なった呼び方がなされているが、小論では「等位関係」を選択する。

2-2　A1とA2の意味関係に着目したもの

漆谷(2014)は、国語辞典に見出し語として採録されているAAタイプの複合形容詞を取り上げ、記述する。漆谷は非常に丁寧な記述の結果、AAタイプの複合形容詞を形成するA1は、「薄い」「悪い」「甘い」「青い」「重い」「暑い」「えらい」「堅い」「黒い」「狭い」「赤い」「痛い」「渋い」「遠い」「長い」「細い」「浅い」「厚い」「遅い」「清い」「ずるい」「にがい」「ぬるい」「太い」「むさい」であり、全部で25語があるとしている。

そしてこれらを

・評価を表す…薄・悪・狭・遅・遠・浅・ずる・むさ
・形状を表す…薄・長・細・厚
・味覚を表す…甘・うま・渋・苦
・色彩を表す…青・黒・赤
・温度を表す…暑・ぬる
・その他……重・えら・堅・狭・痛

とカテゴライズし、そのことより、「こころのいる動きや人の感情、精神状態などを表す形容詞は含まれず、先行形容詞は限られた範囲の意味の語であることが確認される」という結論を導く。

そしてA2についても同様の記述を行い、A2に現れる形容詞の異なり語数は46語で、A1の異なり語数より多いとして、次のように整理する。

・色彩を表す…黒い・白い・黄色い・青い・赤い
・明暗を表す…暗い・あかい・明るい
・温度を表す…寒い・暑い・冷たい
・心情を表す…苦しい・たるい・しつこい・気味悪い・さかしい・寂しい・ずるい・つらい・ひどい・みっともない
・形状を表す…ながい・細い・平たい・太い・短い
・味覚を表す…すっぱい・甘い・辛い・酸い・苦い・うまい
・その他評価を表す…賢い・汚い・すごい・ちょろい・のろい・悪い・かたい・かゆい・こすい・狭い・高い・鈍い・広い・若い

以上から、「どちらかといえばマイナス評価の意味になる語が目立っている」ということと、「心情を表す語もやや存在している」ということと、「後接形容詞は、先行形容詞をより詳しく説明する働きをしているため、バリエーションが増えたものと考えられる」という結論

を導く。

漆谷(2014)の鍵概念になるのは、A1とA2の関係が「同質」「異質」という観点である。そしてその「関係」を観察した結果、次のような結論を導く。

(a) 先行形容詞と後接形容詞が異質の形容詞である場合、先行形容詞は後接形容詞の修飾要素になる。

(b) 先行形容詞と後接形容詞が同質である場合には、両者が意味的にも近似している場合には並列の意味を持つ場合も存しているが、多くの場合で後接形容詞は先行形容詞を補足、説明する意になる。

これは従来の説明が統語構造の説明のみで終わっていたのとは異なって、そこに形容詞の意味的カテゴリーを持ち込むことでAAタイプの複合形容詞の語構成を明らかにしようとしたものである。

しかし、小論は、この漆谷の指摘は接近法としてはすぐれたものであると認めるが、その結論においては問題があると考える。

一つ目の問題点は、(b)の指摘に認められる。複合語は二つの要素が結合して形成している。その統語構造において等位関係を除いて、二つの要素は対等に結びついているわけではなく、右側要素が「主要部head」として語の品詞の決定や意味の範疇を決定する。これは「右側主要部規則Righthand Head Rules」と言われる。今、漆谷の、A1とA2が「同質」の場合は、「後接形容詞は先行形容詞を補足、説明する」という指摘を肯定すると、この「右側主要部規則」に違反することになる。すなわち、(b)は、「並列」の解釈がある場合もあるが、それ以外のほとんどが、先行形容詞が「主要部」であるという指摘になっているのである。たとえば漆谷は「甘辛い」について、「「甘さ」より「辛さ」が強く感じられる味であれば、これを「甘辛い」と表現するには違和感がある」としている。この解釈は、「甘辛い」は、「辛い」ではなく「甘い」を「主要部」としているという解釈となっているのである。

二つ目の問題点は、「心情」をあらわすなどの形容詞がA1には現れないでA2には現れることがあるという指摘に認められる。果たして、このことは複合形容詞の語構成の直接的な問題なのであろうか。なぜなら、形容詞はさまざまな語基用法を持つ。その語基用法としてシク活用形容詞は語基用法として(現れないわけではないが)現れることが少ないということが観察される。複合形容詞のA1位置は1-1で述べたように形容詞ならば語基が立つ部分であり、そうしたことがいわゆる

シク活用形容詞が現れることの阻害条件になっているという可能性もある。そこに現れないことから、何か意味的な制約を論じようとするのは早計であろう。

2-3　小論の解釈

宮島(1980)は、

> 語構成とは「単語のつくりかた」のことであるが、「つくりかた」ということばの多義性が示すように、これには二つの側面がある。一つは、新しい単語はどのようにしてつくられるかという成立事情つまり造語的な側面で、もう一つは、ある単語がどのような構造をもっているかという語構造上の側面である。

とする。宮島の言う前者を「語形成」とし、後者を「語構造」としたとき、従来、AAタイプの複合形容詞について考察はいずれも語構造に照射したものであったと言えるだろう。いわゆるlexiconとは単なる語彙項目の羅列場所ではなく、発音や統語規則や意味や句構造の規則などあらゆる言語情報を蓄えている場所と言えるが、AAタイプの複合形容詞についての従来の研究は、いずれも長い歴史の中で語として完熟しているものだけを取り上げて、その語構造を説明していると言える。そしてその結果として、統語構造を記述する側からは、AAタイプの複合形容詞の統語構造として修飾関係と等位関係があるとしたにとどまり、意味関係に着目して語構成を説明している漆谷は、A1とA2のカテゴリーを記述するものの、どんなカテゴリーがあるかを指摘するにとどまり、語形成にまで話を展開させない。

等位関係にある二つの要素、「高い」と「低い」から、「長い」と「短い」から、「うまい」と「まずい」から、「高低い」「長短い」「うままずい」という複合形容詞が形成されないのはなぜなのであろうか。先に示したことであるが、もし仮に統語構造として修飾構造と等位構造とがあるとするならば、この組み合わせを排除する何らかの規則が、さらに、「甘い」と「酸っぱい」、「青い」と「白い」、「ずるい」と「賢い」が、それぞれ「甘酸っぱい」「青白い」「ずるがしこい」を許可する何らかの規則があることを、それぞれ説明しなければならない。もちろん、漆谷の接近法でも同様で、「低い」はなぜ「高い」を、「短い」はなぜ「長い」を、「まずい」はなぜ「うまい」を、それぞれ補足、説明できないのかという問題に答えなければならないし、翻って「酸っぱい」はなぜ「甘い」を、「白い」はなぜ「青い」を、「賢い」

はなぜ「ずるい」を、それぞれ補足、説明できるのかという問題に答えなければならない。

しかしこうしたことに対する説明の義務は次のように転換すれば消滅する。そもそもA1とA2の統語構造に等位関係はなく修飾関係しかないのではないか、と。すなわち、「高低い」「長短い」「うままずい」において、「高い」と「低い」は、「長い」と「短い」は、「うまい」と「まずい」は、それぞれ意味的に相反する形容詞であることから、その間において修飾関係を構成することがないということで、これらの複合形容詞が形成されないと言うことができることになる。そして「甘い」は「酸っぱい」を、「青い」は「白い」を、「ずるい」は「賢い」を、それぞれ修飾が可能なのであるとすればすむ問題である。

AAタイプの複合形容詞において、A1とA2の統語構造は修飾関係のみであるということは、右側主要部規則の適用を受けるということになる。その結果、「甘酸っぱい」について西尾が指摘したことは、「甘みがあって酸っぱい」という『広辞苑』の説明を支持することになるだろう。「甘酸っぱい」は、「酸っぱい」にはいろいろとある中のバラエティの一つとして「甘みがある酸っぱさ」を示すことになるだろう。小論では、以上から、

［A］ AAタイプの複合形容詞において、A1とA2の統語構造は修飾関係にある。

と結論する。

ところで、谷脇(1997)は、AAタイプの複合形容詞において、A2に連濁が起きるのは、A1とA2とが「意味的に相反する形容詞」の場合であり、「並列構造を成す」と分析している。「甘酸っぱい」（甘い⇔酸っぱい）・「悪賢い」（悪い⇔賢い）・「ずるがしこい」（ずるい⇔賢い）・「薄暗い」(薄い⇔暗い)・「青白い」(青い⇔白い)などはいずれも「意味的に相反する」例である。しかし谷脇は、「並列構造を成す複合語は連濁を起こさない」（好き嫌い・飲み食い・笛太鼓・尾ひれ・山川・行き返り（cf.　食べずぎらい・やけぐい・小だいこ・尾びれ・山がわ・里がえり））ということに着目し、AAタイプの複合形容詞では、A1とA2の関係は「並列構造」でなく、A1はA2の「副詞的修飾語」であると結論づける。しかし、こうした形態論的現象を根拠にすることは少し危険である。格関係と等位関係の場合、アクセントの一体化も連濁も起こらないということは従来指摘されていることであるが、それを根拠とすると、「連濁を起こしているものは等位関係ではない」と

いうことを指摘するにすぎない上に、「連濁を起こしていないもの」については何も証明することができないことになる。たとえばA1が「薄い」の場合に限ってみても、「うすぎたない（薄汚い）」場合は「薄い」と「汚い」は修飾関係であるということを言えても、「うすひらたい（薄平たい）」は修飾関係なのかどうかすら説明できないのである。小論は、A1とA2の統語構造が修飾関係であるという側面のみにおいて谷脇を支持する。

３　ＡＡタイプの複合形容詞の語形成

3-1　語形成規則(1)

漆谷(2014)は『日本国語大辞典』において見出し語として登録されているAAタイプの複合形容詞は異なり語数として96語であり、「目ざとい」「腹黒い」など「名詞＋形容詞」によって構成される複合形容詞に比べ、その数は意外と少ないと報告している。

漆谷が指摘している通り、確かに語彙登録されているAAタイプの複合形容詞は少ない。それは形容詞という品詞自体が有している性質にもよるだろう。形容詞は対象についての属性叙述を本務とする。「名詞＋形容詞」によって構成される複合形容詞は、その複合語内に対象を持つために、量的にもその意味・構造的バラエティの点でも、AAタイプの複合形容詞よりも多くなるのは当然である。それに対してAAタイプは複合語外に対象を持たなければならない。その結果、その対象に対して当該複合語によって属性叙述をしようとすると、それなりの制約が生じるだろう。たとえば、「細い」と「太い」、「堅い」と「柔らかい」、「さびしい」と「楽しい」など、性質として相反するもの同士は、それが結合するということは考えづらい。「細くて太い」や「堅くて柔らかい」や「さびしくて楽しい」によって叙述される対象は同定しにくいからである。また逆に、「しょっぱい」と「からい」、「寒い」と「涼しい」、「寂しい」と「悲しい」など、近似的な形容同士も結合しにくい。それはどちらか一方の形容で十分だからである。さらに、一つの対象が明示されている中で、「細い」と「優しい」、「高い」と「うまい」などは、形容する側面が異なってくることから、「この料理は高うまい」という表現はなかなか取りにくい。

以上のことから、AAタイプの語形成において何らかの規則があるとすれば、次のように一般化できるのではないだろうか。

［B］　二つの形容詞が「同質」で、意味的に相反する場合、また近似

的な場合、それは結合しにくい。また「異質」の場合には、それが形容する対象の側面が異なっている場合は結合しにくい。

しかし、漆谷が記述している既存のAAタイプの複合形容詞でも、このような語形成規則に従って形成されている複合語ばかりではないし、何度も取り上げてきた「甘酸っぱい」など、相反する意味を持つ形容詞が結合している例はしばしばあり、[B]の語形成の制限規則は一般的な傾向であるとは言えても、それほど強い制限とは言えない。

実はAAタイプの複合形容詞は日常的に意外に出会うことが多い。白鳳が33回目の優勝を飾った千秋楽後のインタビューで述べた「バカ賢い」や、中央自動車道の双葉サービスエリア内で販売されている「甲州小梅コロッケ」のキャプションにある「すっぱ美味しい」や、ネット上でしばしば見られる「ワッキーって、寒おもしろいよね」や、一時期流行した「きもかわいい」や「エロかっこいい」など、lexiconに語彙項目として掲載されているとは言い難いが、こうした表現にかなり頻繁に出会うことがある。竝木(1988)は、複合形容詞は「複合名詞と比べて、新造力がそれほど強くな」いと指摘しているが、(辞書登録されている語彙の割には)「新造力」はそれほど低いわけではないのではないだろうか。

3-2　語形成規則(2)　──修飾関係について──

複合語の統語構造に格関係と等位関係と修飾関係があることは何度も触れてきたが、このうちの修飾関係は、格関係でも等位関係でもないものをすべて含むカテゴリーであり、そのバラエティは均一ではないと言える。小論は、AAタイプの「新造力」は、修飾関係のバラエティに依存すると考える。ここではその修飾関係のバラエティを記述する。

修飾関係の典型は、A1がA2の「程度」を示す場合であると言えるだろう。程度のありかたにはいろいろとあるが、まず「程度がはなはだしいこと」を示す関係から見てみよう。「すごい」は「程度がはなはだしいこと」を示す語詞としてかなり頻繁に使用される(8)。そして

(8) 「超」は、最近、アクセントを一体化させ、「超面白い」という形態で使用されることが多く、複合語と考えてよいが、「超」自体が形容詞なのか副詞なのか接頭辞なのか取扱いに悩むところもあり、今回は用例からはずした。なお、本来形容詞である「すごい」は、最近副詞として(活用させずに)使用されることが多い。、

「すご早」「すごうま」(9)などはしばしば見られる。口語においては「くそ（だ）」「ばか（だ）」などが、さらに昨今では「がち（だ）」「まじ（だ）」「ギザ（だ）」「ギガ（だ）」「スーパー（だ）」「神（だ）」など、ナ形容詞が使用されることも多い。これらは本来的には「程度がはなはだしいこと」を表す語彙でないが、現代語ではかなり自由に「程度がはなはだしいこと」を表す語彙として使用されている。こうしたナ形容詞の語基がA1に現れ、「くそまじめな」「ばか賢い」「がち忙しい」「まじすごい」「ギザうまい」(10)「ギガ早い」「スーパー器用な」「神うまい」など、AAタイプとしてかなり形成されている。これらは接頭辞だと言われるかもしれない。しかし、「真新しい」「小高い」「か細い」「だだっ広い」「こっ恥ずかしい」などに比べると、語根的であると言え、小論では複合語として扱う。

今、「程度がはなはだしい」場合の例を見てきたのであるが、「程度」についてはもう少しバラエティがある。たとえば「ちょうどいい」や「低い」などである。しかしこれらはあまり豊かな語彙を持たないし、新語としてもそれほど産出されない。それは属性叙述ということ自体との関係があるだろう。わざわざそれが対象の属性であると取り上げて叙述したにもかかわらず、その性質が「少ない」や「ちょうどいい」などと評価することは、叙述の在り方としては考えにくいからである。ただし、「薄暗い」「薄っぺらい」「薄汚い」「薄黒い」「薄気味悪い」(11)などに見られるように、「薄い」という「程度」は、さまざまなA2の前に現れる。飛田・浅田(1991)での、これらの用例の「解説」は、「やや」と解説されている語詞と「なんとなく」と解説されている語詞に分れる。「薄黒い」や「薄暗い」なら「やや」であるし、「薄気味悪い」や「薄汚い」なら「なんとなく」である。「気味悪い」、「汚い」に比べ、その形容はそこまで形容できないというのが「なんとなく」という消極性を生じさせている原因だろう。これらはどちらも、その属性が度合いの点で低いということであるという点で共通していると言え

---

(9) 実際の発話では、語幹用法として「すご早っ！」「すごうまっ！」の形で用いられる。そのため、「すご早い」「すごうまい」という形態であることは確認できない。

(10) 数年前に中川翔子がブログで使用したことによって流行し、この語は「ぎざかわゆす」という形での使用が現在でもなされることがある。

(11) ほかにも「ほの暗い」などの「ほの」もある。「ほの」は「ほのかだ」の一部であろう。しかし、小論で取り扱っているような形容詞の語基よりもさらに過小の形態が残っている例なので、同様に扱うかどうかは迷うところである。

るだろう。

次は「甘酸っぱい」「青白い」「痛がゆい」「細長い」などの例にみられる修飾関係である。これらは従来等位関係であると扱われたり、A2がA1を補足、説明していると説明されてきたが、小論ではこれらは修飾関係として扱うことを主張してきた。そしてこれらの修飾関係は、「A1という性質を帯びたA2」と考える。つまり、「甘いという性質を帯びた酸っぱい」「青いという性質を帯びた白い」「痛いという性質を帯びたかゆい」「細いという性質を帯びた長い」という関係であると考えるのである。「すっぱおいしい」や「うま辛い」や「狭暗い」や「細マッチョ（な）」などは(12)、こうした関係に基づいて新たに語形成された例であると言えよう。

次は「ずるがしこい」や「重苦しい」や「エロかっこいい」などにおけるA1とA2の修飾関係である。これらは「程度」や「～帯びる」とは違って、「A2はA1によって生じた性質である」という関係と言える。「ずるい」ことによって生じた「賢い」、「重い」ことによって生じた「苦しい」、「エロい」ことによって生じた「かっこいい」という関係である。ただし「狭い」ことによって「しょっぱい」が生じたり「暗い」ことによって「高い」が生じたりすることは想定しにくい。しかし、現在語彙化されているわけではないが、今後「(根が)暗い」ことによって「強い」が生じるという価値観が定着するかもしれない。「あいつ、暗強いよね」などという臨時的複合はないとは言い切れないのである。漆谷の記述からは漏れるが、最近CMで見ることがある「(体が)だる重い」のように、A1に「だるい」がくるような例も見ることがある。それは体の状態として「重い」バリエーションとしてありうるのである。「怖い」から「かっこいい」で「怖かっこいい」や、「ひどい」から「おいしい」で「ひどおいしい」や、「やばい」から「寒い」で「やば寒い」や、「細い」から「優しい」で「細優しい」などが出現しないとは断定できないのである。

以上、小論では語形成の側面から、AAタイプの複合形容詞を考察した。それによれば、A1とA2の修飾関係は以下のようにまとめられるだろう。

［C］ AAタイプの複合形容詞における修飾関係には、

(1) A2はA1という程度を帯びている

---

(12) 特に「味覚」の形容詞において自由に作られる事例に出会うことが多い。

(2)　A2はA1という性質を帯びている
(3)　A2はA1によって生じた性質である
という場合がある。

語形成の規則を述べることにおいて、注意しなければならないことがある。一つ目は、今[C]で述べたことは、それぞれの内容分類を最終的な目的としているわけではなく、修飾関係のバラエティの広さを記述することが目的であるということである。そのため、当該語が(2)の関係なのか(3)の関係なのか分類上の困難が生じることもあるだろう。たとえば先にあげた「エロかっこいい」は「エロさを帯びたかっこいい」なのか「エロいことによって生じているかっこいい」なのかはなかなか微妙なことであろう。「エロかっこいい」がどちらの修飾関係なのかということを決定することが小論の目的ではないのである。

もう一つは、語形成が広く社会一般で行われるわけではなく、狭い世界で、しかもかなり臨時的に行われるのであって、そのため語彙登録されない語彙も多いということである。1980年代にイラストの世界で「ヘタウマ」という言葉が流行した。これは「下手だ」と「うまい」という一見相反する関係にある二要素が結合して、「下手な性質を帯びたうまい」という関係によって複合形容詞ができている例である。しかし、これは「下手」が「うまい」を修飾することができることが、イラスト界で了解された結果なのであって、あらゆる領域で「へたうま」が、たとえば料理の世界で「へたうま」が、許されたわけではない。このように、A1とA2の結合は、一般化される前に、それぞれの使用者のコミュニティにおいて使用される。こうしたコミュニティで許可された結合は、常に一般化されるというところまで至ることは稀で、語彙登録される前に使用を終えることもしばしばである。

4　形容詞語基と語形成　――おわりにかえて――

小論は、AAタイプの複合形容詞を取り上げ、その語構成について説明したものである。従来の結論とは異なって、A1とA2との統語構造は修飾関係であるということを指摘し、さらにその修飾関係には「A2はA1という程度を帯びている」・「A2はA1という性質を帯びている」・「A2はA1によって生じた性質である」という場合があることを指摘し、そうした修飾関係に支えられているために、決して「新造力」が低いわけではないということを指摘したものである。

小論で扱ったのはAAタイプの複合形容詞であったが、A1とA2が結

合しながら複合形容詞にならず、品詞転換conversionを起こしている例はいくつか見られる(13)。「甘辛い」が「甘辛」に、「だる重い」が「だる重」になど名詞として語彙化されたり、畳語形は、「広々（と）」「長々（と）」「深々（と）」など副詞として語彙化されたり、「熱々な」「鼻高々な」など「ナ形容詞」として語彙化されたり、いろいろな品詞として実現されていることを見ることができる。さらに、今まで取り扱われていないが、「クールビューティ（だ）」や「ブルーブラック（だ）」や「ビタースウィート（だ）」なども、英語由来の複合（ナ）形容詞もあり、形容詞として扱う要素も従来のものより拡大しなければならないこともあるだろう。

語としての形容詞について、西尾(1972)は、「形容詞の異なり語の数は動詞のそれに比べてずっと少ない」と量の少なさを指摘しているし、「日本語の形容詞は歴史的に途中で発達がとまってしまった観があり、これをカヴァーするものとしていわゆる形容動詞が発達してきている」と指摘している。確かに長い年月に耐えて語彙化され安定的に使用されている形容詞の異なり語数は少ないし、それに代わって語数を増やしている「形容動詞」を見る限り、そのようなことが言えるかもしれない。しかし、「ッポイ」「シイ」「タイ」「ラシイ」など形容詞化接尾辞が豊富である状況を見たり、活用語尾「イ」が、「エロい」「グロい」「ピンクい」(14)など、新しい語を形成することに貢献している状況を見るにつけ、「歴史的に途中で発達がとまってしまった」というのは簡単に肯定できない。形容動詞にしても、それは確かに語彙化されているはいるが、歴史的に導入の当初より、形容動詞化辞によって語形成されていった結果であると考えれば、それは「発達している」とは言い切れないのではないだろうか。

小論は確かに「AAタイプの複合形容詞」という狭い現象について扱ったものであるが、その視座としては、「品詞」としての複合形容詞の記述、説明で完結するものではない。(品詞ではなく)「形容概念」の問題こそ重要で、こういった場合の丁寧な、さらに広い視野からの記述を行うためにも、「形容詞由来の語基」という視座を持って、現

---

(13) 影山(2009)では「名詞＋形容詞」の場合の例としてこのタイプが多いことが指摘されている。「身重い」ではなく「身重（な）」、「尻軽い」ではなく「尻軽（な）」、「面長い」ではなく「面長（な）」などである。

(14) 山口(2007)で報告されている例である。

象に臨む必要があると考える(15)。

【参考文献】

漆谷広樹((2014)　「複合形容詞の研究　――形容詞＋形容詞の構成による場合――」『日本語史の新視点と現代日本語』pp.488-508　勉誠出版
影山太郎(1993)　『文法と語形成』　ひつじ書房
影山太郎編(2009)　『日英対象　形容詞・副詞の意味と構文』　大修館書店
近藤研至(2014)　「『形容詞語基用法』について」『日本語史の新視点と現代日本語』pp.473-487　勉誠出版
谷脇康子(1997)　「日本語の複合形容詞における連濁現象」『人文論究』47(3)　pp.225-246
田村泰男(2005)　「現代日本語の複合形容詞・派生形容詞・畳語形容詞について」『広島大学留学生センター紀要』16号　pp.13-20
竝木崇康(1988)　「複合語の日英対照――複合名詞・複合形容詞――」『日本語学』7：pp.68-78　明治書院
西尾寅弥(1972)　『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所)　秀英出版
蜂谷真郷(1998)　『国語重複語の語構成論的研究』塙書房
蜂矢真郷(2012)　「上代の形容詞」『萬葉』212　萬葉学会
飛田良文・浅田秀子(1991)　『現代形容詞用法辞典』　東京堂書店
宮島達夫(1980)　「語構成」『国語学大辞典』東京堂出版
三宅知宏(2011)　『日本語研究のインターフェース』　くろしお出版
山口仲美(2007)　『若者言葉に耳をすませば』　講談社
由本陽子(2005)　『複合動詞・派生動詞の意味と統語』　ひつじ書房

(本学教授)

(15) 近藤(2014)は、こうした視座から、形態論ではなく、形容詞の語基が、文中においてどのように使用されるのかということを考察したものである。

文楽鑑賞教室

私は今回の文楽鑑賞教室で、人形浄瑠璃・二人三番叟、解説・歌舞伎の魅力、人形浄瑠璃・絵本太功記尼ヶ崎の段を鑑賞しました。

恥ずかしながら私は文楽に関する知識が全くありませんでしたが、実演を交えた分かりやすい解説のおかげで、すんなりと文楽の世界に入ることができました。また鑑賞教室が始まる直前まで、話を聞き取り理解できるかどうか不安でした。しかし大夫の語りは聞き取りやすく、役によって声を使い分けているため、どの人物が話しているのか分かりやすかったです。更に舞台横に字幕表示があったため、話が理解できないということはありませんでした。

「文楽」と聞くと、昔のもの、堅苦しいものと考えている人がいるかもしれません。文楽は決してそういったものではなく、私達も楽しめる娯楽です。大学で日本文学を学んでいる私達にとって、鑑賞教室は日本文化に触れる良い機会です。文楽が好きな人はもちろん、文楽は初めてという人に、鑑賞教室はお薦めです。

（日文一年　重森　香穂）

歌舞伎鑑賞教室に参加して

七月の歌舞伎鑑賞教室で「傾城反魂香」を鑑賞した。本編前の歌舞伎の見方で、歌舞伎における太鼓の使用の方法が紹介された。現代の舞台劇はさまざまな音響効果を用いているが、歌舞伎ではそれらの一部に太鼓のみが用いられていることに驚いた。太鼓によって表現される風雨は、雨がしとしと降り、風が家の戸をがたっがたっと鳴らす場面までもが思い浮かんだ。物語が始まると、言葉を話すことが得意ではなく物静かな浮世又平と、夫の言いたいことを伝えてやろうとするあまりしゃべりすぎてしまう妻・おとくの対照的なところがすぐに伝わってきた。また、又平が手柄を取られてしまい悔しい思いをしている場面では、表情のみで悔しさが十分に伝わってきた。又平が手水鉢に自画像を描くと厚い石を通り抜けるという不思議なシーンは、どう演出されるのかと思ったが、全く役者さんの演技だけで十分に不思議な様子がわかった。ラストの花道での又平が妻・おとくの鼓に合わせて舞を舞い、見得を切る場面は大迫力で気づくと思わず拍手をしていた。これまで歌舞伎はあまり身近なものではなかったが、この鑑賞教室を通して興味が深まった。日本の古典芸能の素晴らしさを実感でき、とてもよい機会だった。

（日文三年　小島優里）